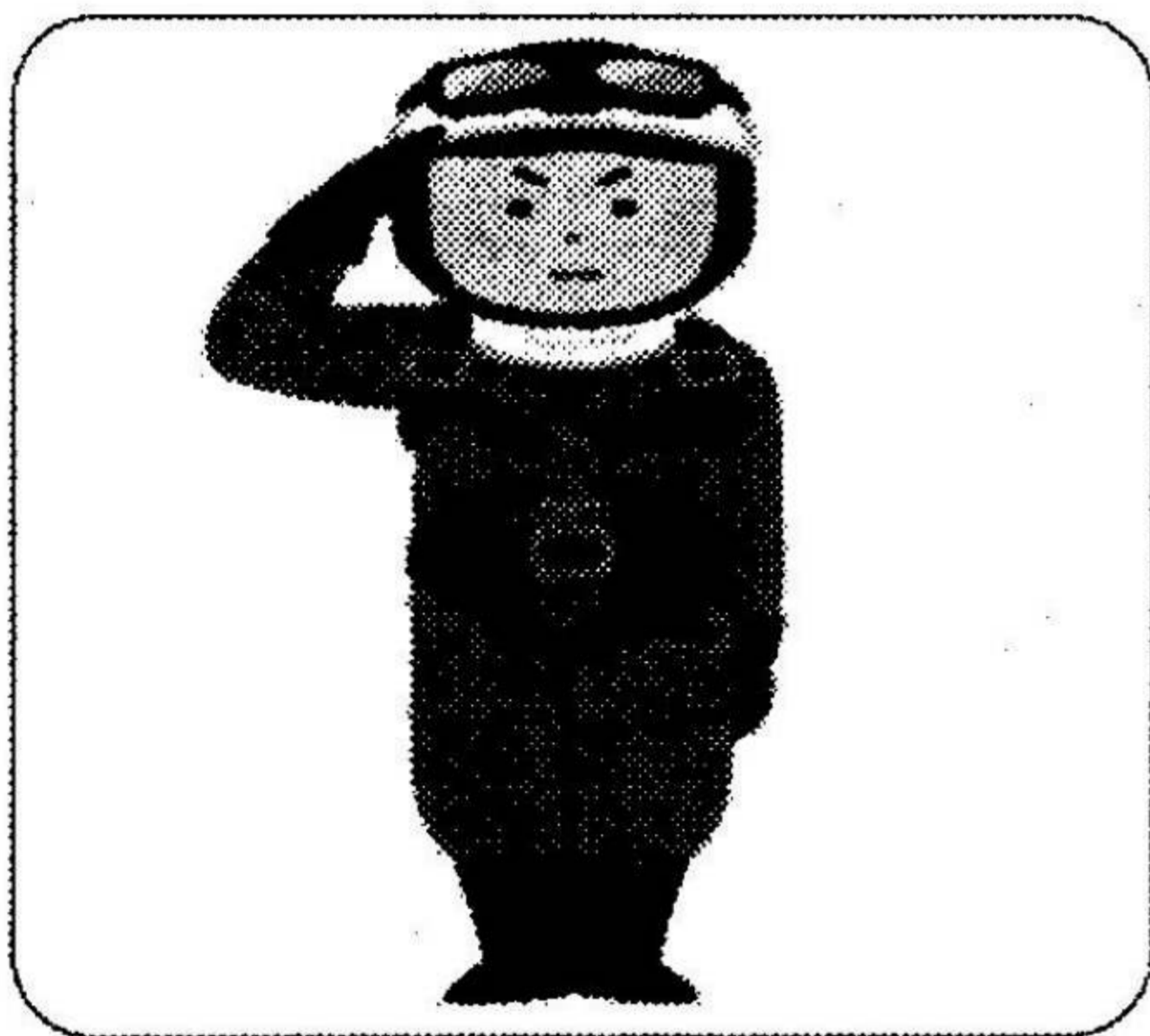


私は1945年6月10日の阿見の予科練の空襲を覚えている。対岸の出島村(旧下大津)に家があったので、空襲によるもうもうたる黒煙がよく見えた。爆撃の様を米田佐代子著「ある予科練の青春と死」により再現すると、「この日は曇りで、土浦上空もかなり厚い雲に覆われていました。・・・そして、姿は見えないままB29による爆弾が降ってきました。第一撃は、主に隊外の防空壕や近くの山林などに落とされたらしく、航空隊はさほど被害はありませんでした。けれども大急ぎ退避しようと走っていた人たち、まだ防空壕に入っていなかった人たちは、既にこの時にたたきつけられてしまったのです。そして、わずか13分後の午前8時3分、兄(米田吉二)たちの避難した鹿島神社下防空壕の真上に2発の爆弾が落とされました。・・・この空襲で、土浦航空隊だけで281名、隣の霞ヶ浦航空隊で23名、周りの民家の人たちや面会にきた家族55名を合わせて357名もの死者が出たのでした。」



土浦には霞ヶ浦(土浦)航空隊があった。「土浦海軍航空隊は、霞ヶ浦海軍航空隊設立前から阿見村地内(霞ヶ浦湖畔)で水上機及び水陸両用機に関する所掌事項を担当していた水上班が独立したもので、飛行予科練習生の教育、航空予備学生等の基礎教育を目的とし、これに先立つ昭和14年3月には飛行予科練習生の教育は、横須賀海軍航空隊から霞ヶ浦海軍航空隊に移管されていた。予科練とはこれらを指す。

予科練への志願、その教育と生活については、次のような証言がある。県厚生連の大塚嘉孝副会長が旧制中学(現土浦一高)5年生の時の氏の回想。「戦局は悪化、航空隊員の大量採用を必要としていた。滑空班(グライダー

部)の主将だった。子供のころから大の飛行機好きで、すぐに入部した。地元であるにも関わらず、土浦中からの志願者は少なく、けしからんと関係者から責められていた。学校側の思惑とも合致し、10人近くで一緒に志願した。予科練で厳しい訓練を受けた後、航空隊に配属され、特攻要員に選ばれた。250キロ爆弾を想定した砂袋を積んで、連日飛行訓練を重ねた。」

**リレー随想**

甲種だけに限っても、別表のよう

**予科練の悲劇  
大量募集はなぜ行われたのか**

に大量の予科練が募集された。特に、1943年から45年春までの2年足らずの間に13万人以上の予科練が生まれたのである。不思議なのは、この期間は既に日本は多くの軍艦や飛行機を失い、とても十何万人もの飛行兵を養成することなどできもしないし、搭乗する可能性もなくなっていたことだ。それなのにどうしてこんなに大量の予科練が募集されたのか。その謎を解く鍵は、当時の戦況と軍部を中心とする日本の支配層の戦局打開の方策にありそうである。

年表を繰ってみると明らかなように、日本の戦争は1941年6月のミッドウェイ海戦で敗れて以来、配色を濃くしていったが、特に、44年のマリアナ諸島のサイパンで「玉砕」し、続くマリアナ沖海戦で空母と飛行機多数を失ったあとは、マリアナから直接本土空襲にやってくる米軍機を防ぐ力もなくなっていた。そして、44年のレイテ沖海戦、45年2月の硫黄島での「玉砕」、3月10日の東京大空襲と続き、4月1日の米軍沖縄上陸となる。約3か月に及んで沖縄県民を巻き込む恐ろしい地上戦が始まった。どうして悲惨な戦争が3か月も続いたのか。「本土決戦」を覚悟した政府が「時間稼ぎ」を沖縄に強いたのである。その間に本土空襲は全国に広がり、軍需工場も破壊され、兵器生産はストップ状態。もはや日本の命脈は尽きたのである。それでも戦争を

やめようとしな。それどころか、6月6日には天皇臨席の下、最高戦争指導会議(御前会議)を開き、「本土決戦」という暴挙が確認されたのである。予科練の大量募集はこの時のためだったのではないか。史料不足で確たることは言えないが、そんな気がしてならない。

歴史に「もし」はあり得ないことは百も承知だが、戦争終結があと2、3週間早かったら、広島、長崎の原爆も無かったし、沖縄戦の悲惨や予科練などの悲劇ももっと軽減されたであろう。まさに「遅すぎた聖断」と言わざるを得ない。

米田さんも先の著書の中で書いている。「土浦航空隊はなぜ6月10日に爆撃されたのか?これがそもそも私の疑問でした。兄たちは、5月8日に奈良出て土浦に来ています。そして、わずか1か月後に空襲されるのです。これでは空襲されるために土浦に行ったようなものです。兄たちは何のために土浦へ移動したのでしょうか。偶然かもしれませんが、6月10日には各地から土浦に予科練が集結していたのではないかと思われるのです。わたしがこのことにこだわるのは、奈良で訓練を受けていた14期の予科練は、本当は、練習生として養成期間が2年半あるはずだったのに、1年余りで『繰り上げ卒業』になったことを知ったからです。それは同時に、予科練を実戦に配置することを意味しました。土浦に来て1か月後、兄たちは『特攻要員』に指されたのです。」こんな流れこそまさに悲劇に他ならない。(斎藤房雄)

**予科練募集状況**

1937~40年	各期約250名
41~42年	各期約1000名
43年(前期)	約3000名
(後期)	28000名
44年(前期)	41000名
(後期)	37000名
45年(前期)	25000名